

# ART KISS

*Contemporary Art Museum, Kumamoto*

# LETTER

FOR KUMAMOTO

ART PEOPLE

vol.

18

2003.11.15 熊本県現代美術館発行



【アート・ド・キャン】  
**ART DE GYAN**

※もう、おわかりですよね！熊本で「アート、どう？」の意です。

**熊本県立美術館分館・本館**

熊本市千歳町2-18 ☎3511-8411(分館)  
 熊本市二の丸2 ☎3522-2111(本館)

- 「第16回紅華会書作展」(4.22~4.27)書家の田中小華さんが主宰する紅華会員34人が、かな作品51点を軸や額やパネルで展示。中央正面に全員の合同作品として、百人一首を扇面書き、華やかな飾り立てを目をひいた。田中小華さんは良寛の歌36首を扇額にし、鉄幹の歌や、作品の日展出品作の帖も見せていた。
- 「成松一成書作展」(4.29~5.5)成松さんの古稀を祝うため、江南中の教え子達が企画した書の個展である。成松さんは良寛に対する思慕(しぼ)から、その詩歌を書き表現したという。《天上大風》や《臆々任天眞》など、良寛の生き方を自分なりの書で自由闊達(かつたつ)に書いており、楽しい会場となっている。
- 「近代詩文書作展」(5.20~5.25)書家井上享子さんが指導する近代詩文書作研究会員13人が、漢字、かな、近代詩文書を46点展示。漢字は「十七帖」や「集時聖教序」など、かなは「関戸古今集」の臨書を帖にしている。創作は白秋の歌や詩などを書いていた。
- 「百華華相社中書展」(6.3~6.8)斎藤幸相さんが指導する14人が、39点を額や軸で展示する初めての書展。漢字の古典臨書から大字かなまで、素直で明るい作品である。斎藤さんは漢字と大字かなの《いはら歌》など9点を見せる。三宅相舟さん、柏原郷雲さんが賛助出品していた。(S.K)
- 「第25回熊本県書道展」(6.10~6.15)熊本書芸振興会(井田峰月会長)主催の書道展である。審査員を含めた会員と準会員の役員が分館4階で、半切以内の作品を80点。本館には、無審査が半切、会友が2x8で約100点、公募の入賞入選作品約200点が展示された。各部とも、漢字、仮名、(近代詩文漢字かなの調和体)、少字数(一字書)篆刻の各体(わたり)、研究の跡が窺(うかが)えた。
- 「九州地区高文連書道展の部」(6.17~6.22)九州地区の各県高校文化連盟が持ち回りで開催している美術・工芸、書道、写真部門の各県代表者展で、書道部門は熊本では今回が初めてである。最近の高文連活動は全国的に目ざましく、九州地区も熊本県もレベルアップには凄(すご)いものがある。ただ、競争に勝つための作品様式にこだわり過ぎないかが気になった。(T.M)
- 「第18回書法篆刻展」(6.17~6.22)書家の平方研水さんが指導する維熊会員の62人の会員が、128点を額や軸などで展示。今回は対句を軸(れん)作品にしている。篆刻に篆書や隷書作品が多く多彩な表裏が見える。「田黄」や「水晶凍」等の印材も並んでいた。日本篆刻家協会の梅野達理理事も賛助出品していた。
- 「第31回翠嶺会書道展」(6.24~6.29)書家野口翠山さんが指導する翠嶺会員25人が66点を額や軸で展示。漢字の行草書や隷書、調和体書が多い。野口さんは蘇東坡の詩を隷書で書き、川津翠芳さんは高青邱詩を行草書で見せている。川端康成や北原白秋、頼山陽の詩等も書で見せ、江上蒼龍さんが賛助出品していた。
- 「第22回熊日新人書道展」(6.24~6.29)熊本日日新聞主催で、新人の発掘と、県書道界の底辺拡大を目的に、毎年開催している。作品は書体、書風ともに多彩である。漢詩や和歌などが、力強く、伸びやかに書かれている。特に高校生の隷書作品は、若さがあり好感がもてた。特選15点、準特選74点、秀作122点が額装展示されていた。(S.K)
- 「第14回女流茶掛け・屏風展」(7.8~7.13)国際文化交流会(鳥飼孝一会長)の主催で、関係各団体から推薦された女流書家が、日本の伝統文化を現代の日常生活の中に活かそうと、掛け軸と屏風という形式で発表する書道展で、今回は90点が並べられた。当然茶室に相応しい語句が選択されており、最近は大表具にも新鮮さが見られるようになって、年々人気が高まっているようである。(T.M)
- 「第3回臨川水墨画協会展」(7.29~8.3)「新(深)発見、くまもと」をテーマとして熊本の花鳥風月を描いた水墨画展。恒松清さんの《竹筋橋》、西村謙一さんの《鹿坑》など、橋の町、炭鉱の町であったという熊本の過去の側面を画題に選んだ作品が目をつけた。(H.T)

- 「第9回大東文化大学熊本県書作展」(7.29~8.3)大東文化大の卒業生と在校生5人の39人が66点を額や軸で展示。作品は、漢字、かな、調和体書等と多彩である。城本鶴城さんの《島崎藤村の詩》や、吉澤善雲さんの《想像・創造》など力強い作品もあった。同大学の先生8人の色紙も賛助出品されていた。
- 「寒玉書道会会員展」(7.29~8.3)県立第一高校創立百周年記念の同校卒業生の書道展である。寒玉書道会の会員16人が46点を額や軸、屏風などで展示。かな作家の創作が多く見られた。沼田曉雨さんは宮本竹運賞を受賞した2曲屏風も見せていた。
- 「第7回書道選抜書道展」(8.5~8.10)広深書道会の「書道」の会員の中から選抜された110人が1点ずつ出品した。漢字の行草書体が主であるが、かなや調和体書など書風も多彩である。江上蒼龍会長は七言二句を対句にし、野口翠山さんは頼山陽詩を、平方研水さんは篆刻に篆書を見せた。
- 「第33回同光会書展」(8.12~8.17)福岡教育大学書道科のOBや在校生24人が「漢字仮名交じりの書」をテーマに額や屏風等で展示。江口幹城さんは「顔よりも心の皺(しわ)を」というモンテニユのことばをかき、宮田祐子さんは「書のわからぬ人は読みたがる、画のわからぬ人はまず何かがいてあるかを見る」という中川一政の言葉のパネルで見せていた。(S.K)
- 「第6回日中友好連合書道展」(8.19~8.24)国際文化交流会(鳥飼孝一会長)では、北京、西安、上海、広東省の各市および桂林における「日中書道交流会」の成果を平成10年度より美術館で発表してきたが、今回は端溪硯の産地である肇慶市での書法交流会の作品を中心に、中国側が13点と、国際文化交流会会員17名の充実した力作、大作40点が展示された。両国の書風の違いが窺(うかが)えて興味深かった。
- 「岩本竹田書作展」(8.19~8.24)本人は退職記念ではないと言った。60歳を迎えるに当たって、自分の今を確かめおきたいとの思いで企画したという。いずれも力感溢れる作品で、人間関係や、自然環境への優しさに眼を向けたことばの選択が印象的であった。(T.M)
- 「第31回六県連合書作展」(8.19~8.24)福岡教育大学書道科の九州六県(福岡、沖縄を除く)出身の在学生29人が32点をパネルや額などで展示。古典の臨書作品から創作まで多彩である。甲骨文字から金文などを古代文字によるイメージで創作していた。学生らしく伸びやかで明るい作品が多かった。
- 「第16回GROUP「愚」作品展」(8.26~8.31)福岡教育大学、特設書道科卒業生の宮田祐子さん、右谷展子さん、山西寿子さんの3人が「愚で遊ぶ」というテーマの書展である。墨染めのシヨールを見せる宮田さん、「在る」という墨での足跡をパネルにした右谷さん、金子みずずの詩を額で見せる山西さん、三人それぞれの工夫が見られる書展であった。(S.K)

**アートスペース大宝堂**

熊本市上通5-6 ☎3544-2155

- 「紫清会書作展」(4.2~4.8)大道書学院に属する熊本市在住の荒木紫明さんが主宰する書道研究紫清会が、1年半に一回のペースで行う会員展で、今回は約20名が篆書、隷書、楷書、行草書、仮名、調和体など33点を出品した。各書体に亘(わたり)ついでに楽に見れるが、幹部と思しき作品には力作があった。
- 「斎藤鶴跡先生七年忌追遠展」(4.30~5.5)元熊本大学教育学部斎藤鶴跡教授の七年忌を迎えて、関係者や教職員の会が開いた追遠展である。今回は色紙や比較的小さい作品を中心に約60点を展示した。近年退職後は、特に甲骨文、金文、篆書一般、隷書等の古代文字を楽しまれた方だけに展示作品はその様式が多いが、カッコリした細字の楷書などには、流石(さすが)に修練の跡が窺(うかが)えるものであった。
- 「書と花の出会い展」(6.5~6.8)紫清会主宰の荒木紫明さんと真生流代表の犬飼翠雪さんは、県立第一高校の同級生である。母校の創立百周年記念に協賛して書と花の2人展をした。荒木さんの伸びやかな書25点と犬飼さんの色鮮やかな生け花35点がうまく響きあって楽しい会場となっていた。
- 「第23回興玄書展」(6.17~6.22)書道研究興玄会(松本達郎会長)の恒例の発表会である。漢字の篆書体、隷書体、楷書、行書、草書体、かな、調和体など各書体に亘(わたり)っているが、楨(おおむ)ね温厚な書風がこの会の特徴のようである。中には、一作中に各書体を交えた意欲作も見られた。
- 「松本達郎古稀書作展」(7.2~7.7)書道研究興玄会の会員が主催者である松本達郎さん(熊本市)の古稀をお祝いして企画した個展で、古稀に因(ちな)んで大小70点を並べたが、体調不良の中でよく頑張ったと思つた。氏の温厚な行草書と仮名作品は見慣れていたが、今回は篆書作品にお目にかかったのが新鮮であった。

- 「第3回玄泉書道会全国チャリティー成家・師範展」(7.23~7.28)競書雑誌を発行して運営をしている玄泉書道会(浦川草徑会長)が日常生活の中で親しめる小さい諸作品の普及と、善意銀行への寄付を目的に一昨年に始めたチャリティー展である。今回は、雑誌の hands 揮毫者および成家・師範の48名が各1点の他、会長が数点を出版していた。(T.M)
- 「第1回墨風会書道展」(8.6~8.11)書家の島田洋翠さんが指導する墨風会会員約60人が約70点を展示。今回は初めての書道展である。漢字の行草書体が多いが墨風は色々あって明るく楽しい会場となっている。夏にふさわしい漢字の一字書を色紙に書いたものもあった。岩永西峰さんや野口翠山さんも賛助出品していた。(S.K)
- 「第31回祝心書作展」(8.20~8.25)熊本大学書道部のOB・OG展である。47名が各1点を出品していたが、この展覧会の特徴は、個展や社中バラエティーに富んでいることである。参観者がそのことを良く知っていて、それを楽しみに待っているとのコメントが多い。顧問であった故斎藤鶴跡氏の賛助出品もあった。(T.M)

**アートルーム イケオ**

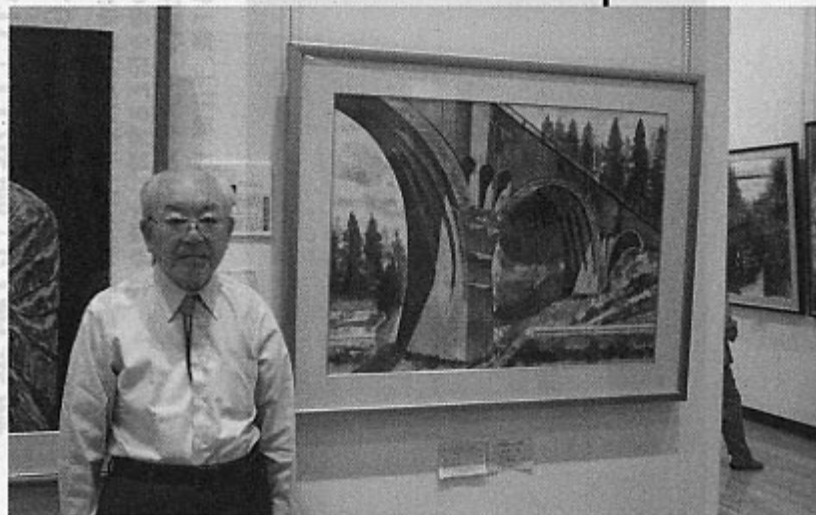
熊本市新市街6-6 ☎3244-1414

- 「自然美の転写アート~ネイチャープリント~作品展」(7.31~8.4)菊鹿町の押し花館・あずの丘のネイチャープリント教室の卒業作品展。ネイチャープリントとは、新聞発された転写技術を元に押し花などをシールにして様々なところに貼り付けてデザインすることができる技術である。ここでは主に押し花のネイチャープリントを洋服や日用品に貼り付けた作品や、ネイチャープリントとパーチメントクラフトやガラスアート、友禅染とが融合した作品、ループアートなども展示されており、ネイチャープリントを実際に体験することもできる。ネイチャープリントは開発されて一年の新しい技術で、これからの発展に期待できる。あまり知られてはいないものなので、この機会に見に行くことが出来て良かった。(H.K)
- 「SHUNICHIRO HAYASHIDA 書展 2003」(8.20~8.25)尚絅大学文学部書道コースの主任になった林田俊一郎教授の5年ぶりの個展である。前個展から、新たな出発という意味で十干(じっかん)の始まりである「甲」をテーマとした。アクリル樹脂、アルミの薄板等を駆使したオブジェ的な斬新な発想が注目を集めていた。(T.M)

**画廊喫茶南風堂**

熊本市北千反畑町5-13宅建ビル1F ☎3433-9664

- 「書・画同源展」(6.21~6.30)書家の野口翠山さんの13回目の個展である。八幡太郎義家の武者絵に、「吹くからに勿来(なこそ)の関と思えども道をせに散る山桜花」と賞が入り、昔なつかしい書画の17点である。書画同源とうたい、美人画や山水画等に書を添えてみせる。
- 「平方研水・書法篆刻展」(7.1~7.10)書家平方研水さんの篆刻に書や墨絵をそえた小品展である。《遊戯三昧》や《折誓》など、篆書に篆刻の印影の赤色がうまくマッチして楽しい展示となっていた。(S.K)
- 「第10回 真美会有志展2003」(8.1~8.10)真美会有志による油絵の展示会。小さな画廊喫茶の中で、お茶を飲みながらゆっくりと作品の鑑賞ができる。一戸ようさんの《淡い春》は、柔らかな色彩で、穏やかに春の訪れを待つ湖畔の風景が描かれている。他にも、身近なものや風景を題材にした優しい色づかいの作品が多く、緩やかな時間の流れを感じた。(A.M)



「第3回臨川水墨画協会展」恒松清さんと《竹筋橋》



「第10回真美会有志展2003」一戸ようさんの作品《淡い春》

## ジェイ

熊本市大江本町6-9(味噌天神電停前) ☎372-8732

●「大江公民館書道部展」(4.30~5.5)熊本市立大江公民館の書道講座(里見三子講師)受講生の年一回の発表会である。月2回、各2時間の講座で、発表の題材は各自の選択にまかされている。今回は、俳句を小型条幅に近代詩文的に表現したものが中心となった。(T.M)

## 阿蘇白水郷美術館

阿蘇郡白水村一関1247 ☎0967-62-8200

●「久多見健堂書展」(7.29~8.31)尚絅大学助教授で書家の久多見さんの5年ぶり3回目の書の個展である。阿蘇の大自然の中にある白水郷美術館での書展にふさわしく、阿蘇を詠んだ中村汀文や山頭火などの歌句を大作にして、意欲ある作品を見せていた。(S.K)

## 熊本伝統工芸館

熊本市千歳城町3-35 ☎324-4930

●「Dyeing summer 麻の布を使って一草木染」(7.29~8.3)麻を草木で染め上げる満田由美子さんの作品。クッションカバーやバック、敷物、のれんなど。今回は夏ということで、コスモスで染めあげた黄色がまぶしかった。茶色や緑の淡い色も、麻にかかれば清涼感が溢れ出す。秋は栗の渋皮を使ったりと、何でも活用される満田さん。これからの作品も楽しみにである。(M.K)



「Dyeing summer麻の布を使って一草木染」作家の満田由美子さん

●「第2回セキ・ステンドグラス工房3人展」(7.29~8.3)ステンドグラスを用いたランプやパネルなどの作品が並ぶ。ヨーロッパの伝統技法と日本の自然美が融合し、新しい光の世界へ見る人をいざなう。(E.I)



「第2回セキ・ステンドグラス工房3人展」の展示風景

●「美島の風を感じて」(7.30~8.3)沖縄にゆかりのある陶芸家3名、ガラス工芸家1名の4人展。皿や湯飲みなどの日常づかいの器を中心に、素材の風合いを生かした温かみのある作品が展示されている。沖縄宮古島壺焼金城陶芸の金城敏信さんの作品は赤みの強い地に鮮やかな青い魚が描かれており、南の島の強い生命力を感じる。(S.Y)

## 画廊喫茶三点鐘

熊本市手取本町3-8有明ビル ☎326-3040

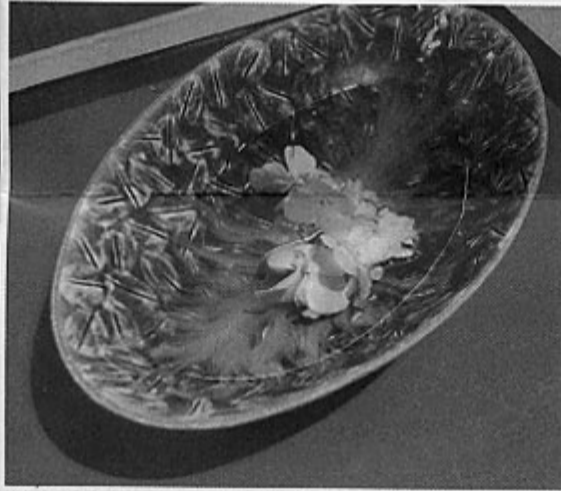
●「平方秀長・墨と遊ぶ」(6.1~6.8)書家平方秀長さんの書の小品展。鳩の羽根2枚で書いたという19点を額装で見せる。「水のうまさに鈴鳴く」と山頭火の句や煮村などに、点と線の抽象的な墨の遊びもあり、頼もモダンな書展である。(S.K)

●「森内和久展 ~扉の奥の物語~」(8.1~8.8)和紙を素材とした写真やオブジェの展示。和紙を線香によって燃やすことで作られる造形は網目のような形を作り出し、見る者に儂(はかな)げな印象を与える。焼くという行為から生まれる空(くう)は森内さんの造語である「存問語」となり、私たちにその存在を問うているように感じられた。(M.A)

## 島田美術館ギャラリー&島田美術館蔵寸龍庵

熊本市島崎4-5-28 ☎352-4597

●「安井建二 陶展」(8.1~8.10)小鉢や中皿などの日常雑器を中心とした陶芸展。一つ一つが一点もので、創るたびにその偶然性を楽しんでいると言う安井さん。陶芸を始める前はエッチングをしていたということで、今回の陶芸の作品にもルーレットで模様を入れたり引っかきキズのような線を入れたりエッチング的要素がふんだんに盛り込まれた作品展になっていた。



「安井建二陶展」安井建二さんの作品

●「関 美恵作陶展」(7.25~8.3)すべての作品が結晶釉という技法で作られている。全体的に白く、器の中にほどこされたその花が開くような貝殻の内側のような模様が美しい。小皿のほかには花びんなどの大きめの作品も展示されていた。(Y.T)

## 鶴屋画廊/ふれあいギャラリー

熊本市手取本町6-1 ☎356-2111

●「西洋美術展」(7.30~8.5)ガレ・ドーム兄弟とヨーロッパ・アンティークコレクション、ガラスを素材に、空やランプの作品が多数展示、自然の中にモチーフを彩り、四季それぞれの表情を巧みに表現されていた、淡い感じの色調がとてもきれいだった。

●「きくちの四季フォト作品展」(7.28~8.5)知られざる菊池市の素晴らしい歴史や景観、人々の暮らしなどを、四季を通して写真で表現されていた。

●「メッセージポスター展WA」(7.28~8.5)熊本デザイン専門学校が「WA」をテーマに、様々なポスターを制作、作品数22点という展覧会、作者がどのように「WA」を感じているかがよくわかる個性的な展示会であった。(H.Ta)

## 洋食屋てつ

熊本市水道町4-1, 1F ☎351-1358

●「CLAYZM」(9.2~9.28)「粘土人」、松岡志保さんの個展。期間中オムライス注文するとアーティスト手作りの小旗がついてくるという楽しいおまけ付だった。《失恋ロケット》という新作は、巨大なオブジェの中にライトを内蔵し、粘土の重々しさを乗り越える表現だった。大規模な平面作品、繊細で装飾的な中型リースなど、前回の小品中心だった展示とは打って変わり、「粘土人」宣言を打ち出した元気あふれる展示だった。(H.T)

\*熊本市現代美術館で学芸員実習が行われました

実習カリキュラムの中で、初めて展覧に挑戦した実習生を紹介します。

- 小宮広子さん (H.K) (佐賀大学)
- 田添由紀さん (Y.T) (佐賀大学)
- 天野萌さん (M.A) (九州産業大学)
- 一木恵里さん (E.I) (崇城大学)
- 田尻博敬さん (H.Ta) (崇城大学)
- 隈部麻衣さん (M.K) (日本女子大学)
- 吉田里美さん (S.Y) (熊本大学)
- 松原明日香さん (A.M) (熊本大学)

## G III

熊本市現代美術館のギャラリーⅢ(G III ジェー・スリー)は、熊本市を中心に熊本、九州のアーティストを順次紹介し応援していくスペースです。

入場無料となっております。皆様のご来館をお待ちしております。



光の絵画  
菊池恵楓園  
絵画クラブ展  
7.30~8.31

黒木重雄展  
9.3~10.5



兼城昌山展  
一書のひびき  
10.22~11.30

## 岡本太郎展—絶対の孤独—

(7.5 - 8.24)が開催されました。

2万7千人を超える入場者の皆さんの熱意に、改めて岡本太郎の存在感を確認いたしました。

**TARO OKAMOTO**  
La solitude absolue



熊手風情

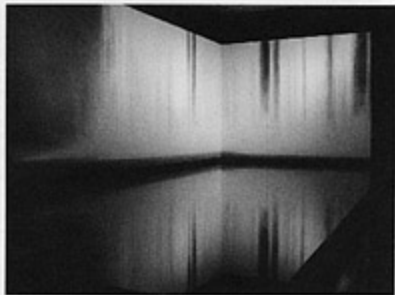
## CAMK流 現代「日本画」の精華展

(9.6 - 10.19)

熊本市現代美術館が、日本画の静謐にしてダイナミックな、真の姿を伝える装置に大変身！

◎出品アーティスト

中島千敏、千住博、日高理恵子、紙内佐斗司、本田純、福田美樹



千代田 (The Fall)

### \*今後の展覧会

「マリーナ・アブラモヴィッチ ザ・スター」展 (11.22-2004.2.1)

「斎藤義重展」 (2.14-3.28)

各展覧会で開催されたイベントについてはホームページをご覧ください。 <http://www.camk.or.jp>

# World News

## 「第50回ベネチア・ビエンナーレ」

「ドリームアンドコンフリクト(夢と衝突)」というテーマのもと、フランチェスコ・ボナミ以下6名のキュレーターが企画。グローバル化が進む世界において、国別にアーティストを選考して見せる方法の限界を暗示するような展示が多く目に付きました。当館のインターナショナル・アドバイザーのホー・ハンルー、サラ・ハッサン両氏による報告会「ベネチア・ビエンナーレを語る」も7月27日に開催されました。



「ベネチア・ビエンナーレを語る」講演会風景



芸術子展覧館のレクセンブルク館 スーメイ・フエの  
(エア・コンディションド)

## 「第8回イスタンブール・ビエンナーレ」

第8回イスタンブール・ビエンナーレが開催されました(9月20日~11月6日)。イスタンブール・ビエンナーレはアヤ・ソフィアや地下宮殿などの歴史的建造物を会場に行なわれる三年に一度の現代美術の展覧会です。今回は"Poetic Justice(詩的な正義)"をテーマに、世界中のさまざまな国と地域から80余名のアーティストが参加し、作品を発表しました。



ジュンクエン・ハツシバの作品  
(ハブ・ビー・ニュー・イヤヤー・メモリアルプロジェクト・ベトナム)

この連載では、熊本にお住まいで、様々なジャンルで活躍されている方々に、活動に寄せる熱い思いを語っていただきます。第17回目は緒方様さんに楽しいお話を聞きました。

略歴/熊本県立女子専門学校(現熊本県立大学)英文科卒業。昭和34年より熊本で現代詩、構成詩、アニメイズム詩論、女性詩など執筆。熊本文学賞など受賞。著書に「緒方博詩集」等。

—様々な表現手段のなかで、詩を選んだきっかけとは何だったのでしょうか？

緒方:昔からものすごく不器用で、私にできそうなことは、詩しかなかったんです。それと、生まれた時から病弱で、病状生活が多く、幼心に「死」を意識していたの。それが、病気をすると同時に、一種、大胆な夢をみる子にさせたのでは、東京大空襲に耐えられなくて、戦時期間に、本籍地の甲佐に母と疎開。「詩とメルヘン」に載っているような詩を書き散らしていたら、私の家を駐屯の本所にしまだのこっている京都の兵隊さんたちが、「うちの子どものもどきだから詩を書いて」って次々に頼みに来るのね。食料の乏しい時期に、詩を書いてあげたお礼として、牛乳の缶詰なんか持ってきてくれたのよ。母が目をまん丸にした(笑)。十三歳の少女がとんだ興奮をしちゃった。

—そして就職を迎えて、復学されていよいよ文筆活動に動かれるんですね。

緒方:そう、まず女子学校の三年生に。そしてすぐ文芸部をつくり文集を創刊。「原野翔太郎詩」なんて難しいこと書いたわ。やがて四年修了で県立女専(二年後、県立女子大)の第一回生に。ジョイスやラフカディオ・ハーン(ハーン)の日本の英文学者だった永松定徳教授の一冊目の教員になり、片や、五高(熊本)生と知り、彼の大学受験のための上京が新旅旅行だった。はやかった(笑)。東京では、通信社の新書社電の翻訳アルバイトをしたり、文芸家協会の先輩詩人や小説家先生たちに頼られたり。あとでは有実館の編集部に入ったけど、どれもみな、今の私に活きているかも。

—今年4月に懐しくも亡くなられた、映画文化界に多大な影響を与えた、緒方さんの伴侶である藤川治水さんとの出会いについてお話しできますか？

緒方:藤川とはね、たしか「切腹」という映画が封切されて、熊本の文化面一頁を便っての対談があり、そのとき、私は軽渾沌批評家と勝手なことをしてやる女詩人、つまり藤川と私の対談ということで、出会ったの。当時、藤川に負けない位、私もヘビースモーカーで、それが藤川の映画評の論点を乱したようよ。それから新聞の特集などで、よく両方に声がかかるようになってね。でもそのうち私の東京時代から出ていた離婚問題が、熊本でようやく解決することになり、藤川



詩人

# 緒方 惇さん

Jun Ogata

に「明日、東京へ帰る」と、はじめて状況を語ったの。そしたら藤川ったら「じゃあ、俺と結婚してくれ」って泣いて頼むのよ。男の涙でそのとき初めて見た。藤川は、一度も結婚しなかったんだって。東京の実家で、当時ある雑誌にいた父に、嬉しそうに「じゃあ、うちで手伝って貰おうか」と言われ、「うん、明日熊本に帰る」っていったら、「そんなに熊本の良いのか！」って抱きかかされてねえ(笑)。そんな感じで熊本に戻ってきちゃったのよ。

—緒方さんの行動力には本当にいつも驚かされます。僕は、緒方さんのことを芸術の堅苦しい枠に収められない自在な行動力から、いつもアクティビストとして感じているんですよ。テレビの仕事や、演劇の方面にも多分に行動力を発揮されていますよね。

緒方:RKK(熊本放送)のテレビの初期、土曜午後の二時間半の自主番組として、熊本出身の女性詩人第一号で日本で初の女性史研究家の志野幸枝を長期取材。構成から収録会の司会までしたのが、大きな仕事の一つ。舞踏編成詩や映画構成詩もNHKなどでもつくったり。造形ゆかりの下益城での、田辺三氏作の組曲「日本一石段讃歌」作詩。それから演劇関係では、市民会館公演の「緑くれない」で、熊本の女たちをミュージカル仕立てで書いたり、ラフカディオ・ハーン家熊100年には、やはり市民会館公演の「へんさんさんの熊本」の原作・脚本。2日連続演目、おかげで後年、またパートIIにあたるものを書かせて貰いました。ハーンも造形も、どの主人公たちも、みな境界を越える人びとで、アニメイズムで、吟遊詩人的なの。だから私の中では、適応しあっていることだと思うけれど。

—詩を書く際のポイントのようなものがあつたら教えてくださいませんか？

緒方:そうねえ、私は英文科出身のせい(笑)で英文学にはエッセイでもふくまれているユーモアが、詩の中にもどこかにエッセンスとして欲しい。と、もともと詩は絶望的にお盆にならないでしょ(笑)? だから高貴な気を出して書く人もないし、そこが文学の世界では、かえって一番可能性を秘めているんじゃないから。伝統的な定型もない。ただ、どこか一行に、オリジナルに響かぬ発火点があれば、対象と自分が全力でぶつかり合う必然性、偶然性を捉えたとき、そこに詩を作る意味がはじめて生まれるから、

その、女神のウイंकのような瞬間を逃さないこと、かしらね。

—アクティビストであり、詩人である緒方さんが今一番やりたいって思っていることは何でしょうか？

緒方:小さい単位での、子どもたちや、若い人たち、ふだん詩に縁遠い人たちを対象の「詩の出前講座」みたいなものを。昨年まで熊大の総合講座で、各学部の学生たちに「詩のアニメイズム」というのをやっていたの。それが、医系、理系の学生から、とても活発なレポートが毎回出たということもあって、それと平行して、藤川が残した映画「あつじ屋」や映画文化史関係の資料の整理も、なんとかしたい。

—改めてお問い合わせですが、緒方さんの将来の夢は？

緒方:将来の夢というより、いまや“近”将来の夢ね。藤川にかまけて出せなかった詩集2冊、東京大空襲で次々に死んでいったクラスメート。その中には、戦後初のオリンピックというんで、まだみつからないまま、まるで茨山のオリンピック道路に更に行方不明にさせられた少女も。彼女たちは“二度殺された”のよ。まだ私の船に在るわ。その追悼の詩集「小箱・香箱・玉手箱」。もう1冊はときどき、永遠”って、病と向き合っている私のこの詩集。そしてじつはもう1冊、藤川への詩集「風情集」を、どれも形残、でしようね。

—天國のお父さんと藤川さんに「そんなに熊本の良いのか！」って、また絶句させるようなことは？

緒方:うっ、うーん、それはもう無理みたい(笑)。

—ありがとうございました。

(8月1日、訪:美術協会講座、聞き手:南高宏)

## 今月の展覧会

- パリ ポンビドーセンター 「ロバート/ソニア・ドローネー、ソニア/シャルル・ドローネー」展(～2004.1)
- ロンドン テート・モダン 「ジグムント・ボルケ」展(～2004.1)
- ニューヨーク ハイットニー美術館 「ケイティ・グリーンモン」展(～2004.1)
- 福岡アジア美術館 「トルコ三大文明展」(～12.7)
- 大分市美術館 「THEドラえもん展」(～12.23)
- 鹿児島国立美術館 「ヘンリー・ムーア創造の世界展」(～11.3)
- ハウステンボス美術館 「オスマントルコの女性たち」(～12.14)
- 熊本県立美術館 「神と人とファラオ 古代エジプトの美」(10.24～12.7)

## 今月の4コママンガ

「なにに味？」



イラストレーション: 越乃 智子

## 編集後記

昨年10月12日に開館して、はやくも1年が経ちました。開館直前の数週間、連日朝4時までの準備が昨日のこのように思い出されます。本当に早い1年間でした。総入館者数も25万人を超え、「人間の家」としての現代美術館がようやく息づき始めたということですので、2年目を迎え、ますますがんばってまいりますので、これからもよろしくお付き合いします。

(副館長 南島 宏)

### 寄稿者紹介

#### 兼城 昌山 (S.K)

Shoan Kamehiro

10月22日から11月30日まで、現代美術館G3(ギャラリーⅢ)で、私の書業50年の書展が開かれます。見てください。

#### 森山 淡草 (T.M)

Tanuso Moriyama

書(芸術)の現代性とは?「現代性」の条件は?いろいろな所でいろんな主張を耳聞して、確信ある立場の人の話でも、なるほどと思ったり、そうかなと思ったり、首をかしげたり、勉強するしかないか。

### 学芸員より

#### 本田 代志子 (H.H)

美術展開館から1年、気持も落ちたにしたいと思います。

#### 藏座 江美 (S.S)

読者の教を深められた方はぜひ、ホームギャラリーに足をお運びください。

#### 全澤 頌 (S.K)

1日の30分くらい声をかけられたイスタンブール訪問、お別れがってこも違うもの。

#### 坂本 顕子 (S.S)

日本美術の時に千原さんのお話をきいたのがいい思い出です。

#### 富澤 治子 (S.S)

イラン女性のノーベル賞受賞は、ナイド賞後、心に残る感動になりました。

#### 竹田 苗 (S.T)

最近月がとってもきれいに輝いている気がします。秋になったからでしょうか。

#### 山室 りさ (S.Y)

寒くなりました。もうすぐ顔に霜がのっておいしくなる季節です。

発行元/ART KISS LETTER アート・キッス・レター Vol.18 2003年11月15日発行 ©無料©

編集人/田中 幸人

編集長/南島 宏 担当/富澤 治子

印刷/熊本県印刷センター協賛組合 デザイン/松永 社デザイン事務所

発行/熊本県現代美術館 〒860-0845 熊本市上通2-3

TEL.096-278-7503 FAX.096-359-7894